

006 うさお

60 歳になりました。爺いだなあといまさらながら思った。で、定年延長になりました。昔ならすげえ歳だなあと感じたのに。

自分ではあまり歳を食ったとは感じていない。が、働くのは嫌だが、とりあえず年金の貰える歳までは働くことにしよう。矢澤理論に近づけるために……。だが、定年に伴い技術士手当が無くなってしまった。この分がうさおのお小遣いの分だったのに。



著書名	作者	概要	☆幾つ？
生誕祭上・下	馳星周 文藝春秋	バブル絶頂期の東京。ディスコの黒服から地上げ屋に変身した堤彰洋。金を動かす快感に溺れ、金に麻痺し深みに嵌まってゆく…。80年代の若者達の暴走と破滅。地上げコロンゲーム。	☆☆☆☆ 大学生の青春群像を書いている割には、登場人物がやけにじじ、ばば臭い。けど読める。読める。後に残らない。素晴らしい。
さまよう刃	東野圭吾 朝日新聞社	不良少年たちに蹂躪され殺された娘の復讐で父は一人を殺害して逃亡する。犯人を裁く権利は遺族にあるのか。社会、マスコミ、そして警察まで…。その復讐行の結末は…。	☆☆☆ この人の作風なので、すらすら読めるのだが、最近の圭吾はちよいと作風が猟奇がかかる。これを墮落と見るか、新境地と見るか。
引金の履歴	乃南アサ 文藝春秋	袋から取り出し、包装紙を解きにかかった。織江の動悸が速まる。膝の上の紙の中に掌に乗るほどの黒光りする拳銃があった。少女から主婦へ、サラリーマンへ。人々を巡る一挺のコルトが殺意を刺激する。	☆☆☆ 三浦朱門の小説とか最近読んだ誰かのモチーフにも同様なものがあった。凶器はそれだけで使いたい要求が起きてくる。判るよ。(おいおい。。)
アサシン	新堂冬樹 角川書店	暗殺者は花城涼。育ての親に暗殺者として育てられる。女子高生リオは父に欺かれ死に追いやられる。二人は同じ男を狙っていた、それが助かる道。リオが男にナイフを刺した時、暗殺者はリオを助けた。二人の逃避行が始まる。	☆☆ 映画「アサシン」を思い描いたが、それほど面白くは無かった。あれはブリジット・フォンダが良かったんだなあ。
闇に用いる力学 赤気篇	竹本健治 光文社	闇に潜む豹。襲い来る突然死。爆発魔に毒殺魔。秘密結社の暗躍。超能力少年集団のレジスタンス。これはまだ序章、全体が良く判らない。	☆☆ 全体が良く飲み込めない。大変つまらん。次は青気編か？
ブラック・マジック	大岡玲 文藝春秋	連続殺人鬼の遺伝子研究者、トラウマを持つベンチャー企業社長、権力闘争に焦る教団代表、家庭崩壊のライター。この四人が出会い、想像を絶する結末への疾走がはじまった…。	☆ オウム真理教をネタに持っているのだろうが、使い古されて新鮮味が無い。想像を絶さないよ。
幻の城	大久保智弘	剣術指南役鶴飼兵馬は御前試合で藩主の不興を買い脱藩した。公儀御庭番の闇の世界に身を投じた男が、知りえた藩の秘密、元妻の真実とは…。	☆ あまりにも人物設定のシチュエーションに懲りすぎ。で、計画倒れ。ストーリーが全く詰まない。
贅門島上・下	内田康夫 文藝春秋	御宿の孤島で起こる連続殺人、不審船、里見伝説。島の秘密に肉迫する浅見は、生きて島を出ることができるのか。	☆☆☆ 御宿に仁右衛門島は本当に存在する。島の人は怒らないのか？
あたしが海に還るまで	内田春菊 文藝春秋	義父にレイプされ続け、見て見ぬふりをする実母と訣別し、16歳で家を出た静子の凄絶な青春時代。東京への出奔、中絶、スナックのホステスから、マンガ家や歌手へと、まるで本人の実録のよう。	☆☆ あっ、また、義父のレイプ話だ。よほど腹に据えかねているんだなあと言うことが判る本。

禿鷹狩り	逢坂剛 文藝春秋	極悪刑事にかけられた執拗な罠。ヤクザも南米マフィアも手玉にとる男の前に最強の刺客が現れる。で、意外な結末が待っているのだが、新たなヒロインの登場か？	☆☆ 意外と詰まらなかった。期待していたのに。結末は「あわつ」って感じ。
一千年の陰謀	井沢元彦 角川書店	平将門が護持していた三種の神宝を現世で狙う者がいる。竜野は、夢の中で将門の娘・滝夜叉姫のお告げを受け、伝説の宝をもとめ東奔西走するはめに。異色伝奇サスペンス。	☆ 猿丸幻視行のような作品を期待していたが、「猿丸幻視行」面白かったのは、やはり梅原猛のパクリだったからか。
発火点	真保裕一 講談社	12歳の夏一。浜に倒れていたあの人。母のため息。家に寄りつかない父。そして事件は起こった。21歳の今、あの夏の日々を振り返る。刑期を終えたあの人帰ってくる…。	☆☆ ハードボイルドにもなっていない。ただ哀愁だけを盛り込んだもの。
カウンセラー	松岡圭祐 小学館	臨床心理士嵯峨敏也は小学校の女性教諭に注目する。彼女は独自の音楽療法を用いて不登校の児童たちを立ち直らせ、文部科学省からも教育者として高い評価を受けていた。が、彼女の一家を襲った惨劇が、彼女の人生を大きく変えてしまった。	☆☆☆ 結構ミステリになっていた。伏線もあり、変な心理トリックではない。読めます。
三屋清左衛門 残日録	藤沢周平 文藝春秋	日残りて、昏るるに未だ遠し。家督をゆずり隠居となった元用人・清左衛門。世間から隔てられた寂寥感、老いた身を襲う悔恨。しかし、かつての執政府は紛糾の渦中にあった。	☆☆☆ 手堅い味を出していますが、あまりにも事件が無さ過ぎる。日常を狙ったのでしょうか…
煌きの瞬間 (とき)	三橋松太郎 文芸社	すべてを失った戦後、街は焼け出された人たちと駐留軍で溢れていた。進駐軍の華やかな暮らしと、敗戦国民の毎日。混乱の中で笑顔を忘れない人々を追った写真集。	☆☆☆☆ 子供の頃に見た横浜の風景が蘇ってくる。色の無い世界は古めかしく見えるが、昔はそれなりに楽しかった。
東京の戦後	田沼武能 筑摩書房	街のざわめき、路地裏のぬくもり、子どもたちの輝き。ぬくもりと喧騒のあの時代。GHQと銀座、その後に訪れる岩戸景気の前、逞しき人々の群像写真集。	☆☆☆☆ 子供の頃には進駐軍が沢山居た。銀座は子供には縁が無いので行かなかったが、トマソンでいつか使おうと思います。
アクセス	誉田哲也 新潮社	高校生の翔矢と雪乃、従姉妹の可奈子が謎のプロバイダに登録。奇怪な事件が発生する。同級生の自殺、電源を切っても着信するケータイ	☆ さて、語らない。状況を深刻に語るだけ。物語が浮き上がってきちゃうぞ。
殺されざる者	鳴海丈 徳間書店	秘密組織“サンクチュアリ”が経営する殺人ゲーム地帯“ダンテ島”から脱出した、記憶喪失の男と金髪の美少女。彼らを抹殺するために放たれたのは、最悪の異常殺人鬼たち。東京が血と炎で真紅に染まる。	☆☆ 思ったとおりの展開で、思ったとおりの結末です。もちろん馬鹿みたい。
第七の天使	鳴海章 勁文社	「聖徒軍団」と称する教団の「始祖」は獄中にいる。残された教団メンバーの軍事組織が始祖奪還のため日本に対し最終的なテロをしかける。。	☆ 聖書から題を取っているが、内容は「殺されざる者」と同工異曲。従って詰まんない。
刺客請負人	森村誠一 新潮社	許嫁者を藩主に奪われ、故郷も追われた病葉刑部。江戸に流れつき絶望の果てに身をやつした刺客請負業。武士は職を失い、商人は肥えふとる。将軍綱吉の悪政、浅野遺臣の吉良邸討ち入りなど	☆ 森村誠一に時代劇は合わない。藤沢周平と比べちゃ酷かな。
出口のない海	横山秀夫 講談社	甲子園の優勝投手・並木浩二は大学入学後、ヒジを故障。新しい変化球の完成に復活をかけていたが、日米開戦を機に、並木は「回天」搭乗。しかし彼は「魔球」を諦めなかった。	☆☆☆ この人は警察なのか、新聞記者ものが面白い。これは流し読みをしちゃいました。

あなたとワルツを踊りたい	栗本薫 早川書房	真夜中の電話から洩れ聞こえるあえぎ声。電車の中、内腿にまとわりつく指先。ねっとりとからみついて離れない視線。平凡な娘はづきは、名前も顔も知らないあいつにつきまとわれていた。	☆ タイトルに釣られて読もうと思ったが、読欲が沸かない。途中で本を投げ出した。
真夜中の神話	真保裕一 文藝春秋	発端は航空機の墜落事故。その直後に、首なし死体がチャイナタウンで発見。アニマル・セラピーの晃子は、墜落現場から奇跡の生還を遂げ、自ら事件の渦中に突き進んでいく。吸血鬼もの…	☆☆ やはり出来不出来があるようで、読者に迎合しようとする、作品は死にますね。
鎖	乃南アサ 新潮社	音道貴子の刑事人生は最大の危機にいた。ここはどこ？犯人グループは？たった一人で敵と対峙する彼女の脳裏を期待と絶望が交錯する。このデッドロックを抜ける手段が果して存在するのか。	☆☆☆☆ 音道がだんだん弱くなる。もっと強い彼女が見たい。30歳過ぎて綺麗な姉さんと呼ばれているようじゃあだめだ。
藤沢周平全集 第12巻	藤沢周平 文藝春秋	小伝馬町牢獄づめの青年獄医・立花登をめぐる多彩な人間模様。好評のシリーズ三作をおさめる。	☆☆☆☆ これも淡々と語られているが、藤沢周平っぽいと言えばいい。赤ひげを意識か。従妹との色模様が面白い。
悲しき人形つかい	梶尾真治 光文社	ホーキング博士に、自分の足で歩いてもらいたい！無名の天才発明家・機敷埜風天は、壮大な夢を実現すべく、脳波を直接受信して動作をサポートする介護支援機器「BF」を開発していた。	☆☆ スプラクナ作品でギャグが詰まんない。
刹那の街角	香納諒一 角川書店	拳銃は要らない。同情は敵。捜査に必要なのは、心の襷を辿る指先と人の哀しみを見極める眼だ。新宿の裏社会とアジアの地下銀行の取引の陰で、幸薄いひとりの女が命を落とした。	☆☆ これもぐつと来ない。ハードボイルドを模し、異常な状況を前面に出してくる。アイディアの枯渇か。
段ボールハウスガール	萱野葵 新潮社	ふとした事件がきっかけで労働意欲を捨ててしまったOL。勤めを辞め、アパートも追い出され、浮浪者の仲間に入った彼女、でも、ちょっとイイ女かも…。書き下ろしビンボー話。	☆☆☆☆ 大変特殊な事情からルンペンの生活に落ちたOL。社会を逆手に取り生きていくが、次第にルンペン臭さが…。
化生の海	内田康夫 新潮社	加賀の海から水死体で発見された北海道余市の男。遺品の古ぼけた土人形から、孤独な男の素顔が浮かび上がる。浅見光彦の名推理が失われた魂をいにしえの呪縛から解き放つ。	☆☆☆ 鑑定団風の発端から事件に入るが、もう警察庁長官の弟いうことは知られており、水戸黄門的面白さは無い。
心では重すぎる	大沢在昌 文藝春秋	渋谷、この街から物語が始まる。心に比べれば、人間の体なんてのは軽いものさ。失踪した人気漫画家を追う私立探偵・佐久間公の前に立ちはだかる謎の美少女。薬物、新興宗教…	☆☆☆ 新宿鮫以来どうも話のプロットが典型的でいまいち物足りない。筆力で読ませるのだが。

ウクライナに2週間行ってきた。言葉が通じない、ロシア語だ。私達のホテルは1泊100ドル、ウ国の平均月給が350ドル。とても高い割りに、初日に使った石鹸がない。チップを置いてみたら翌日に石鹸があった。スパシーバ。

民族建築と生活博物館を見に行ったら、田園を再現した民家園のようなもの。お客さんが多く花嫁、花婿も居た。こちらの風習で披露宴は市内の景色の良いところに一族郎党引き連れて写真を撮るようだ。ジプシー風の娘が売り子をしていた。ウクライナで出会った女性の中では一番の美しさであった。誰かに写真を撮ったかと聞いたが誰もいなかった。残念！でも、ウクライナ料理屋の給仕さんは美人だった。ミス・イリナさん。(写真よりもっと若くて綺麗！)

